

安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 神社の祭神 丸山祐之
- 2 安曇野への文化の入り口は何処か 原 明芳
- 3~6 穂高神社の御船祭と隠された若宮の御祭神
. 刈間健志
- 7 歴史は変わる! 池田義光
- 8 ニッポン全国「穂高見命」めぐりの旅 古川幸男
編集後記 金井 透

発行 : 安曇誕生の系譜を探る会 発行責任者: 丸山祐之
会報編集委員長: 本郷敏行 事務局長: 川崎克之
〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3 ☎090-5779-5058



撮影 : 小松宏彰

神社の祭神

会長 丸山祐之

会では「安曇氏族の興亡（金井恂著）」をテキストとし勉強会を進めているところですが、その中に“全国の綿津見神社と安曇氏族”という一項があります。安曇氏族は綿津見命を祖神として祀る氏族であることから、全国の綿津見命を祭神とする神社854社について、その分布と各神社由来等の調査結果が示されております。この中で金井さんは「神社の創建の事情はさまざまであり、長い歴史の中で祭神・神社名称の変遷があり、また神社自体の興亡もあったことが分かった。中央や地域の勢力争いに巻き込まれることが多かったと思われる。神社は神社領地や氏子によって支えられており、そうした状況変化により変遷してきたと思われる」と述べています。

神社の祭神は大きく分けて①氏神型：血縁・地縁によって結ばれた在地の氏族の祖と伝承される神、あるいはその氏族を守護すると信じられた神を祭神とする。②勧請型：神霊は分割して祀ることができるという考え方により、大元の神の分霊を他所に遷して祀ること。③人神型：人間を神として祀る、に分類できるそうです。

例えば信濃一宮の諏訪大社。新聞紙面で知ったことですが、現在の祭神の建御名方神とその妻八坂刀売神はそれ程古くはなく、公式に固定化されたのは明治に入ってからという研究結果もあります。室町時代以降江戸末期まではたくさんある祭神のひとつであり、その序列も高くなく、「複数の神の一つ」という扱いだっただのこと。七年に一度行われる御柱祭は平安時代に始まったという説もあり、相当古く、自然崇拜との関りが深く、建御名方神との直接的関係は無いようです。祭神と祭祀（行事）との関係も留意する必要があります。

明治維新の神仏分離政策により、多くの神社の祭神が変更され、現在の社号や祭神としての歴史は意外と浅いようです。

新谷尚紀氏によると「祭神は、その神社の特性を物語る非常に重要な要素である。しかし、歴史の変遷を顧みず、現行の祭神だけに注目していると、その神社の歴史や性格を大きく見誤ってしまう場合があるので、気を付けたい」とのこと。大切な視点だと思います。

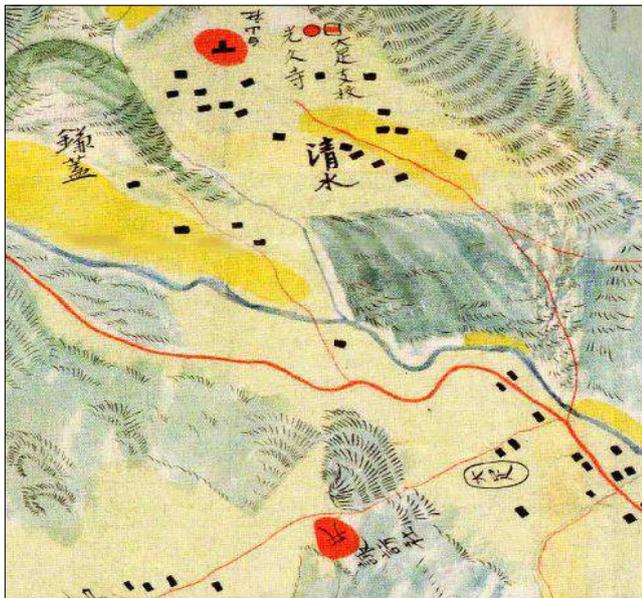
安曇野への文化の入り口はどこか

安曇野市立豊科郷土博物館 館長 原 明芳

現在、安曇野への人と物の出入りは、長野自動車道、国道19号、そして糸魚川街道（国道147号）、加えてJR大糸線など、松本を經由あるいは通過して南からやってくる。かつて文物は、安曇野にどこから入ってきたのだろう。

関ヶ原の戦いから半世紀ほど経った17世紀中頃に製作された「正保国絵図」をみてみたい。安曇郡・筑摩郡の中で最も太く記さる道は、中仙道とそこから洗馬でわかれ松本―会田―麻績を通り善光寺に向かう北国西街道、通称「善光寺道」である。続いて太く描かれるのは、奈良井川の東を、松本―光―明科―生坂と結ぶ川手道と、塔原村と北国街道会田宿を結ぶ、大足通である。最も貧弱な線で描かれるのが、松本城下から梓川を徒歩で渡り、穂高、池田と結んでいる通称糸魚川街道である。

200年経った「天保の国絵図」（19世紀前半）は、やはり中山道と北国西街道を太く、川手道と大足通がやや細く描かれる。正保国絵図と大きく違うのは、現在の安曇野市域にいくつか道が描かれることである。一つは川手道から分かれ、熊倉橋を渡り成相新田宿、穂高宿、穂高川、高瀬川を渡り池田宿、大町へ、その道と成相新田宿で合流する松本から奈良井川を新橋で渡り、平瀬を抜け梓川を歩いて渡り、飯田村を経る道がある。さらに小倉村から岩岡村で梓川を歩いて渡り小宮村を通り、野麦道に接続する道がある。



信濃国東筑摩郡中川手村周囲分見全図（明治初期）の一部分

江戸時代の安曇の物流ルートは、一つは松本と糸魚川を南北に結ぶ糸魚川街道、もう一つは北国西街道会田宿から分かれて安曇に出てくる大足通である。前者は、江戸時代の当初、重要度が低かったが、架橋されるなど整備が進められ、複数のルートができあがり、江戸時代の終わりには松本と日本海とを結ぶ大動脈になってきてい

る。このルートが、現在の鉄道や高速道路に継承されてきている。後者は、当初は太く書かれているが、19世紀の「松本藩領図」には記されていない。糸魚川街道とは対称的に、役割を低下させてしまう。逆に大足通は、中世に安曇野においては大きな役割を果たしたといえる。中世の大足通沿いには、会田・塔原・光・田沢氏などが展開していた。『寛政重修諸家譜』の真田系図によると、これらは海野一族とされる。海野氏は滋野王の子孫と言われ小県郡海野荘を根拠地としていた。治承・寿永の乱で、源（木曾）義仲に従った海野幸広は、備中国水島の戦いで戦死してしまうが、その子幸氏は、弓馬の名人としても有名で、最初は木曾義高（義仲の子）に従ったが、その後は源頼朝に重用される。その孫に、会田次郎、塔原三郎、田沢四郎、借屋原五郎、光之六郎がいたとされる。

嘉暦4年（1329）の諏訪上社「大宮御造栄之目録」によれば小県郡の海野と筑摩郡の会田が御門戸屋の造営を负担している。応永七年（1400）の大塔合戦では、小県郡の宗家海野氏とともに、会田岩下、大葦（足）、飛賀留（光）、田沢氏が、反守護勢力として戦っている。文明18年（1486）年には、小県郡の宗家海野氏が村上氏と戦った際に、応援として参加した会田岩下豊後守が戦死している。

このほか、大足（明科地区）の光久寺薬師堂の日光・月光菩薩は、墨書から文保元年（1317）に仏師善光寺妙海が滋野氏女並びに源朝長のために造立されたことがわかる。滋野氏は海野氏であり、大足通沿いに海野氏が進出してきたことを物語っている。このほかにも明科地域には、光久寺、雲龍寺、法音寺、長光寺など、現在もある、あるいはかつての真言宗の名刹が多い。海野一族によって崇敬の厚い寺院であったと考えられる。

このように、会田氏を始め塔原、田沢、光氏など筑摩郡海野氏は、大足通一帯に鎌倉時代に勢力を張るが、小県郡海野宗家と密接な関係を保っていた。大足通は会田盆地と川手地方の海野氏を結ぶ道であるが、正保国絵図にある会田町村から横川村を通して小県郡へ向かう道とつながれば、筑摩郡と小県郡とを結ぶ海野一族にとって重要な道になる。

古代、伊那郡を北上し筑摩郡の国府を通り、小県郡を抜け多賀城に向かう東国経営の大動脈である東山道は、筑摩郡内で北路が分かれる。鎌倉時代の海野一族は、その分岐点を抑えたことになる。

安曇野市域の奈良時代の遺跡分布は、犀川、高瀬川、穂高川、それに会田川が合流する地域に集中する。そこは、東山道にもっとも近い。安曇野には多くの文物と情報をもたらしたのは、そこを結ぶ大足通ではないか。

穂高神社の御船祭と隠された若宮の御祭神

刈間 健志

現在、穂高神社は本殿主祭神として穂高見命を、左右両殿に綿津見命と瓊瓊杵尊を配祀している。また若宮社に安曇比羅夫命を、相殿に信濃中将(ものぐさたろう)を配祀して、御船祭の由来をこの若宮社に帰せしめている。

若宮裏には平成4年、軍船上に直立する阿曇比羅夫像が建立された。傍らの石碑文には以下のような文言が記されている。

「大將軍大錦中阿曇連比羅夫は、天智元年(662年)天智天皇の命を受け、船師170艘を率いて百済の王子豊璋を百済に護送・救援し王位に即かず。天智2年新羅・唐の連合軍と戦うも白村江(朝鮮半島の錦江)で破れ8月甲戌27日戦死する。9月27日の例祭(御船祭)の起因であり、阿曇氏の英雄として若宮社に祀られ、英知の神と称えられている。伝統芸能である穂高人形飾物は阿曇比羅夫と一族の雄姿を形どったものに始まると伝えられている」「明治初期までは8月27日例祭、新暦となり9月27日となる」



Wikipedia 「阿曇比羅夫」の項にも「663年8月27日-28日の白村江の戦いで戦死したとされる。穂高神社の御船祭は毎年9月27日に行われるが、これは阿曇比羅夫の命日であるとされる。」とあることから、平成4年以降に著された記事の多くがこの石碑の一文を参考としているようである。碑文を刻むにあたり、神社内でどのような話し合いが持たれたのか知る由もないが、初めて御船祭を見物した人でも過不足なくその由来を理解できるよう配慮した様子が窺われる。それは次の二点がはっきりと記されているからである。

a) 阿曇比羅夫將軍が白村江の戦いで戦死した。その命日8月27日が御船祭の由来である。

b) 明治初期まで御船祭は8月27日に行われたが、新暦になって9月27日に移された。

しかし、この二点には大なる疑いがある。

先ず a) について、日本書紀では阿曇比羅夫將軍の戦死を描いていないことを挙げなければならない。阿曇比羅夫が王子豊璋を王に即かせるため船団を率いて百済へ渡った様子は確かに日本書紀に記されている。しかし、その

後、阿曇比羅夫將軍が新羅・唐連合軍と前線で戦い戦死した記述は、どこをどう読んでも見つけることはできない。船団を率いて百済に渡って以降の阿曇比羅夫將軍の消息は杳として知れないのだ。

日本書紀以外にも「白村江の戦」を描いた文書が存在しているのではないかと?

数年前、神社側に直接尋ねて回答を得た。「ひとりの神社職員の方が日本書紀を斟酌して阿曇比羅夫將軍の戦死という事実を見出した」との由。やはり日本書紀以外に手がかりはなかったのである。そして b) について、神社の古文書は明治初期まで御船祭の催行日を7月27日としている。宮地直一博士も「穂高神社史」の中で同様の日取りを記していることから、神社側は何故か意図的にこれを誤ったということになる。

以上二点の疑義から引き出される結論は、ひとつしかない。阿曇比羅夫將軍の命日を御船祭の催行日に合致させるため強いて伝説を作ったということである。目的は一体何であるのか。詮索しようとも思わないが、平成になって流布された御船祭の由来については、これがフィクションであるということだけは指摘しておきたい。

〈御船祭と御祭神〉

平成4年、若宮裏に阿曇比羅夫像が建立される以前は、「陸上がりをした安曇海人族が、上古栄光とともにあった海の記憶を留めるため、風習として伝えてきたのが御船祭である。」そのような声がしばしば聞かれた。

昭和62年刊「海人族のウジを探り東漸を追う」の中で黛弘道氏も御船祭について「海の祭儀が姿を変えながらも連綿と伝えられてきたのであろう」との雑感を述べている。

本殿の主祭神、穂高見命は綿津見命の後裔であり、さらに安曇氏は穂高見命の後裔であるから、御船と主祭神の関係より鑑みて素直な感想を述べられたのであろう。

ところで、江戸時代も中頃までは主祭神が穂高見命ではなかった。

元禄11年、穂高組邑々寺社御改帳によると

大明神(本殿) 天津彦火火瓊瓊杵命

左殿 天兒屋根命 天太玉命

右殿 玉屋命 天鈿女命 石凝姥命

これらの祭神の配置は天孫降臨に因んだもので、京都吉田家の神道の影響下にあったものと考えられる。この頃の御船祭の様子は明確ではないが、御船は担ぎ船であったようで、割と質素に行われていたようである。

「穂高神社史」(昭和24年刊)の中で宮地直一博士は御船や御船行事について次のように述べている。

「その船と称するは会々恰好の類似するため、航行に因む由来に基づくのではない。御船行事は単なる神賑

の目的を以ってせらるるのではなく、もともと祭祀に先立ち神霊を向かえ奉った遺風であり、・・・(中略)・・・かくして前夜に神迎えを畢えて、翌朝に奉仕するのが当日の本祭で、御船行事はもと之が豫儀であったのを、後に移して本儀の中心に据えたのである」

宮地博士においては、もはや神輿が船形であることに特別な意味はなく豫儀であった行事がいつしか華やかさを増して本儀の中心になったとしている。その一方で、御船行事の源流を「諏訪の風儀を本様とする派生的現象」と見て、諏訪大社柴船行事からの影響に言及している。

この頃の主祭神と祭との対応関係を見る限り、船形に特別な意味合いを見出すことはできない。元禄時代すでになくなっていくが、かつては境内に諏訪社(南宮)があって、「本宮・若宮・南宮」三宝殿の存在により穂高神社は「三宮」を別称した。宮地博士は御船行事の源流を廃宮となっている南宮の遺風と見たのである。

幕末に近づくに連れ、御船祭は華美の色を増して現在に至るが、その契機になったかも知れぬ記述が「善光寺道名所図会」(天保14年)の中に見出せる。

主祭神 穂高見命
南殿 石姥女命
北殿 瓊瓊杵命

「例祭七月廿七日、祭礼ノ節ハ氏子ヨリ船ノ形ヲ作りテ色々ノ美服ヲ以テ是ヲ飾ル、コレ往古此辺湖ナリシ時ノ余波トイフ」

穂高見命が主祭神として漸く姿を現し、また巷間で流行していた安曇湖(仮名)の伝承を巧みに取り込んで大いに庶民の支持を集めたことが窺える。今も神社敷地内に、犀龍小太郎の像が置かれているが、安曇湖(仮名)上を船が行き交う様を御船祭に重ねて、これを祭りの中心に据えようとした意図が窺える。祭りの原義は遠ざかり、その中心は神から人へ、神への奉仕から練り物(享楽)へと移りはじめている。

〈流行と信仰〉

現在、穂高神社若宮相殿には信濃中将(ものぐさたろう)が祀られている。相殿というのは実際には存在しない社殿で、安曇比羅夫命とともに若宮社に合祀されているという意味である。安曇比羅夫命が若宮社の祭神として登場するのは幕末から明治初期にかけてなのに対し、「ものぐさたろう」が若宮社あるいは末社に現れるのは意外に古く、戦国時代の天正年間にはその片鱗が見えている。当時「若宮御宝殿」の奉仕を行ったのは犬甘島(現松本市島内)の犬甘氏であったから、「ものぐさたろう」は小笠原家の家老犬甘氏の氏神として穂高神社に祀られることになった、と一志茂樹博士は主張している。その後、物臭太郎本地譚は関西地方において御伽草子として流行し、「おたがの大明神」(「おたが」は「お多

賀」とも「穂高」とも解釈されている)として(物語上も、現実としても)里帰りすることになるのである。

江戸時代になってさらに信仰化が進み、信濃国司「信濃中将(ものぐさたろう)」は穂高神社の造営者としてその名を刻したことが信府統記(享保九年)に見える。信府統記「穂高大明神(現穂高神社)」の項に記される由緒書の内容を要約すると、

- ① 皇御孫(ニニギノ尊)が穂高嶽に降臨した
- ② 文徳天皇の御宇、信濃中将が穂高神社を造営した
- ③ 桓武天皇の御宇、田村利仁が義死鬼という東夷を退治した

大きく分けると以上三点に要約される。①②は現在も本宮・若宮の御祭神として崇敬を受けている。③に関しては、明治以降の穂高神社の御祭神、縁起、由緒においてさえ全くその影を感じさせない。

宮地博士は次のように言う。「享保九年にできた信府統記に至って延暦年中田村利仁の義死鬼退治の一齣を加え、これまでにない武事的色彩を交えたが、田村將軍の異賊退治に関する物語は寺社の縁起に織り込まれて信州の一円に広がり、大に人気に投じていたので、本社もまた大勢に推されたのであろう」

流行が去ってしまったせいなのか、明治期を迎える頃には義死鬼退治の話は社伝から完全に消滅してしまう。しかし、今でも筑摩神社は八鬼の首塚を祀り、放光寺・満願寺では八鬼の怨霊を調伏し、犀の宮神社は境内社に八面大王を祀っている。魏死鬼の巖屋を守り、有明山神社を産土とする鼠穴地区は現在も御船祭の主人的役割を務めているが、実のところ御船祭は八面大王伝説を多分に、そして多面的に取り込んで発展してきたのではないかと思われる点が散見される。ともすると若宮社の御祭神安曇比羅夫命に仮託された真の御祭神こそ、口にするこゝろさへ憚られた八面大王その人なのかもしれない。

社地に祀られたほとんどの祭神が現在まで引き継がれているのに、跡形さえも残していない八面大王魏死鬼。忌まわしいその呼び名ごと消し去られてしまったかのようなキナ臭さを感じさせる。

〈おふりょう行事〉

旧暦の七月二十六日、二十七日に行われていた例大祭は明治維新太陽暦の導入により九月二十六日、二十七日となり今日に及んでいる。

宵祭、本祭において祭参加者は各地区の旗を持って整列し、神楽殿を周回する。これを「お布令(ふりょう)渡し」という。宵祭においては等々力区が、本祭においては鼠穴地区(松川村)が先頭に立ち、昔から「鼠穴の茅野氏のお布令旗が来なければ御布令が渡らない」などと言われ、今でも松本城主小笠原氏の定紋「三階菱」入りの布令旗を持った鼠穴の茅野さんが列の先頭に立っている。

お布令参加地域には、「鼠穴」の他「耳塚」「立足」「狐島」「押野」「古厩」など八面大王に関わる地域も

見られるが、殊に耳塚地区は古くから祭りで使われる榊(そよご)を寄進してきたことで知られている。

宮地博士は言う。「祭礼における榊の献進は、ほかにも例のあることであるが、その意味は神事に必須の用木として、一社にとり最も有縁の所より奉納せられるものである。(中略) 従って耳塚の地に浅からぬ由縁があったことが考えられる。」



そして最も重要なのが首塚を祀る筑摩神社であるが、現在旧安曇郡内の地域が参加して行われる御船祭に旧筑摩郡の地域からの参加者はいない。

ところで、鼠穴の茅野氏が「三階菱」の旗を持って参加するのは、穂高神社がかつては小笠原氏の庇護を受け、配下の武将細萱氏が神社の大旦那として造営を手がけていた名残であるが、その当時「若宮御宝殿」への奉仕を犬甘島の犬甘氏が行っていたことは前述したとおりである。犬甘氏は小笠原家の侍大将や家老を務める家柄であったから、その居城林城にも近く、小笠原氏の厚い崇敬を受けた筑摩神社を、犬甘氏も奉ずるところとなっていたに違いない。江戸初期に催行された御船祭には当然犬甘氏も参加していたはずで、其の役どころは筑摩神社を代表して、お布令に参加することではなかったろうか。八面大王に関わる地域がそれぞれ御船祭におけるきわめて重要な役割を担っていたのである。

<若宮とは>

中世以前、穂高神社本宮にどのような御祭神が祀られ、どのような祭りが行われていたのか。戦で記録が焼失したため、残念ながらそれを辿ることはできない。若宮社に至っては、明治時代初期に安曇比羅夫命が現れるまで「大明神」とだけ記され、具体的な神名は明らかではなかった。

そもそも若宮社とはいかなる神を斎祀する社殿なのであろうか?

広辞苑によると

- ① 本宮の祭神の子供をその境内に祀った神社
- ② 本宮を他の地に新たに勧請して祀った神社

日本大百科全書によると

若宮神社ともいう。基本的には本宮の撰社・末社として主祭神の御子を神に祀る社をいうが、時に本宮に対

してその主神の分霊を勧請した社を若宮といい、また非業の死を遂げた怨霊を慰め鎮めるために祀った社を若宮と称する例も少なくない。

主祭神の御子を神に祀った例としては、若宮八幡の仁徳天皇、春日若宮の天押雲根命、大神神社若宮の太田田根子、梅宮神社若宮の橘諸兄などの例がある。本宮に綿津見命、若宮に穂高見命であれば定義どおりの組み合わせだが、実際はそうになっていない。

倉田兼雄著「信濃有明山史」には「八面大王の幼い子供や婦女等は島(松本市島内)へ流され、その後犬養の姓にて勢力を得た」旨の伝承が記されている。あくまで伝承だが、本宮に八面大王、若宮に物臭太郎(大王の子供)ならび通りの組み合わせといえる。

仁科濫觴記には「鼠賊等は島に引き連れ行き、戒め繩をときて追放したり」と見え、「隠れたる鼠等の輩をご赦免有りて八鬼山原を給わり・・・」許されて土地を与えられた様子もあることから、信濃有明山史の伝承は仁科濫觴記の内容を織り込んで発展したものであるようだ。

「島」というのは犬甘氏の本貫であり、島内と新村の境、樽木川の氾濫原には「ものぐさたろう」の伝承地がある。何とも興味深く思わせぶりの伝承である。

一方、「非業の死を遂げた怨霊を慰め鎮めるために祀った社を若宮と称する」例として、後鳥羽院・順徳院の怨霊を鎮魂するため鶴岡八幡宮内に築かれた若宮社や、井上皇后が幽閉後産んだとされる「雷神」の怨霊鎮魂のためつくられた霊安寺若宮や火雷神社若宮。菅原道真など八所御霊を祀る下御霊神社若宮(和光明神菅原和子を配祀)。藩主に謀殺された島津忠兼の祟り鎮めのため造営された、鹿児島島出水の若宮神社など枚挙に暇がない。

祟り神を慰撫し、鎮魂することによって強力な守護神になるとする信仰を御霊信仰という。北野天満宮創建までの経緯は御霊信仰の最も典型的な例であろう。

滅ぼされ、身体を切り刻まれ、離れた複数の場所に埋葬された八面大王の怨霊は、格別の方法をもって鎮められねばならない悪霊であるはずだ。そのため若宮を設け、鎮魂を行ったと考えて矛盾はなかろう。

<御祭神の名は?>

悪鬼、悪霊と化した八面大王がそのままの名称で御祭神となることはありえまい。何か別の祭神名で祀られたはずである。

埼玉県に鬼を祀る鬼鎮神社があるが、衡立船戸神と八衢神、二柱が祀られている。船戸神は岐神、久那土神、クナド神、クナト神とも言われ賽の神や道祖神の原型とも考えられている。「日本書紀」のサルタヒコ、「古事記」の八衢神と同神である。

天孫族にとって鬼とは本来、在来の日本人や弥生系の人々のことで、その後天皇の体制に反逆する者を一般に鬼と言うようになった。だから鬼の系譜に属する神は土俗神や地祇に属する神ということになる。その他、外来の神も可能性がある。

ところで「ものぐさたろう」が戦国時代の天正年間、穂高神社に持ち込まれていたことを前述したが、天正七年の西大祝文書に記される敷地社のリストには「少彦根社 俗にはものぐさ太郎と云ふ」の注記があって、「ものぐさたろう」が実は少彦根(名)命として持ち込まれていたことがわかる。少彦名命は常世からやって来てオオクニヌシの国づくりに協力するパートナーで、薬や甘酒の神として知られている。ものぐさたろうは出世して国司信濃中將となり、百二十歳まで長生きをする。健康長寿の「ものぐさたろう」と薬や甘酒、常世の神である少彦名命。まさにピッタリのイメージではなかろうか。



信濃中將はその後少彦根命と切り離されて若宮に祀られることとなる。

天正年間、境内社で土俗神・地祇・外来神にあたる神は、牛頭天王・子安大明神・保食神・少彦根命の四柱である。牛頭天王を除く三神は江戸時代から明治、平成の世まで永く穂高神社の境内社として祀られている。保食神と子安大明神は女性神、少彦根命はものぐさ太郎の化身、そして牛頭天王は疫病神として名高いが、当初(平安時代)は御霊を鎮めるために祀られた歴史がある。祇園御霊会は祟り神である牛頭天王を鎮魂して守護神へと導くための祭りである。そうしてみれば八面大王が身をやつす神としてこれ以上ふさわしい存在はないだろう。牛頭天王は幕末まで境内社に祀られた後、明治初期安曇比羅夫が若宮に現れるとともに退いている。「ものぐさたろう」が後に境内社を離れ若宮の祭神となったように、八面大王もまた若宮の祭神となったのかもしれない。当然、八面大王魏死鬼などという名で祀られはしない。

非業の死を遂げたと伝えられる八面大王と若宮の御祭神「安(阿)曇比羅夫」

二人の横顔が今ゆっくりと重なっていく。

++++ 穂高神社 御祭神の変遷 +++++

天正七年(1579年) 「西大祝文書」
前欠(本殿など不明。境内社のみ)
若宮大明神(祭神名不明) 牛頭天王社
子安大明神 八意思兼命社 保食社
少彦根社 (俗にはものぐさ太郎と云ふ)

元禄十一年(1698年) 「穂高組邑々寺社御改帳」
大明神(本殿) 天津彦火火瓊瓊杵命
左殿 天兒屋根命 天太玉命
右殿 玉屋命 天鈿女命 石凝姥命
天照大神 若宮大明神(祭神名不明) 牛頭天王
子安明神 八意思兼命 八幡 保食神 少彦名命

天保十四年(1843年) 「善光寺道名所図会」
主祭神 穂高見命 天照大神社
南殿 石姥女命
北殿 瓊瓊杵命
八意思兼命 八幡社 保食神 少彦名神 (以上四柱相殿なり)
若宮社(祭神名不明) 牛頭天王 子安社 天満宮

明治六～九年(1873年～1876年) 「県神社明細帳」
奥社 穂高見命 里宮 中社 穂高見命
左社 綿津見命
右社 瓊瓊杵命
神明社(天照皇太御神) 若宮社(安曇比羅夫)
八坂社(素戔鳴尊) 子安社(木花開耶比売命)
保食社(宇気母智命) 鹿島社(武甕槌神)
秋葉社(軻遇突智命) 事比羅社(大物主命)
菅原社(菅原道真) 疫神社(素戔鳴尊)
四神社(誉田別尊 八意思兼命 品陀和気命
蛭子神 猿田比古神 少名彦神)

現在(概ね戦後)

奥社 穂高見命 里宮 中社 穂高見命
別宮 天照大御命 左社 綿津見命
右社 瓊瓊杵尊
若宮社(安曇連比羅夫命) 若宮相殿(信濃中將)
八坂社(素戔鳴尊)
子安社(木花開耶比売命) 保食社(宇気母智命)
鹿島社(武甕槌神) 秋葉社(軻遇突智命)
事比羅社(大物主命) 八幡社(誉田別尊)
疫神社(素戔鳴尊) 四神社(誉田別尊 八意思兼命
蛭子神 猿田比古神 少名彦名神)
菅原社(菅原道真公) 歌神社(柿本人麻呂公)
八王子社(五男三女神) 諏訪社 巖島社 穂高霊社

歴史は変わる！ (その3) 池田義光

かつて私たちが知っていた歴史的出来事や考察は、新しい史料や遺物などの発見や研究の進展によって変わり、それによって教科書が書き換えられるということは、実は多々あることを今まで2回にわたって述べてきた。今回も古代の歴史の中からかつてと変更されたものを、前回に続いていくつか紹介する。

1 推古天皇について

【従来の説】推古天皇の実態は蘇我氏に操られた傀儡天皇であった。

【現在の説】推古天皇は傀儡ではなく、推古朝は、天皇推古と摂政厩戸王と大臣蘇我馬子との三者により政治が行われた。



【高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】「国内では、大臣蘇我馬子が587年に大連の物部守屋を滅ぼし、592年には崇峻天皇を暗殺して政治権力を握った。そして、敏達天皇の後であった推古天皇が新たに即位し、国際的緊張のもとで蘇我馬子や推古天皇の甥の厩戸王(聖徳太子)らが協力して国家組織の形成を進めた。」

【高校参考書：山川出版『詳説 日本史研究』】「推古朝は、大王推古と厩戸王と大臣蘇我馬子との三者による共同統治により権力の集中が図られ……」

2 大化の改新について

【従来の説】①名称：645年の暗殺事件を「大化の改新」とするものもあった ②暗殺事件の首謀者：中大兄皇子 ③改新の詔：これにより改新の方針を示した。

【現在の説】①645年の暗殺事件が乙巳の変。この後の諸改革を「大化の改新」という。

②首謀者は、中大兄皇子説の他、軽皇子(後の孝徳天皇)との説が有る。

③「改新の詔」は疑問が出されている。後世に『日本書紀』の編者によって粉飾されたものとの説あり(郡評論争など)

【高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】①②「中大兄皇子は蘇我倉山田石川麻呂や中臣鎌足の協力を得て、王族中心の中央集権をめざし、645(大化元)年に蘇我蝦夷・入鹿を滅ぼした(乙巳の変)……こうした孝徳天皇時代の諸改革は、大化改新といわれる。」③注釈：「日本書紀」が伝える詔の文章にはのちの大宝令などによる潤色が多く見られ、この段階で具体的にどのような改革がめざされたかについては慎重な検討が求められる」

3 日本最古の貨幣について

【従来の説】「和同開珎」が日本最古の貨幣である。読み方は「わどうかいほう」

【現在の説】1991年(平成3年)に奈良県の飛鳥池の底から7世紀後半から8世紀後半の工房跡が発見され、その後の発掘調査で300点近い「富本銭」が出土した。中には天武天皇の時代のものがあり、現在、「富本銭」が日本最古の貨幣とされている。

【現在の説】「富本銭」より古く、天智天皇の時代に「無文銀銭」が鋳造されたとするが、これが貨幣かは疑問もある。

【中学教科書：教育出版『中学社会 歴史』】富本銭(天武天皇のころにつくられた、日本で最初の貨幣ですが、どのくらい使われたかは不明です)和同開珎(わどうかいちん・わどうかいほう)

【高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】「708年(和銅元年)、武蔵国から銅が献上されると、政府は年号を和銅と改め、7世紀の天武天皇時代の富本銭に続けて、唐にならい和同開珎(わどうかいちん(かいほう))を鋳造した。銭貨は都の造営に雇われた人々への支給など宮都造営費用の支払いに利用され、政府はさらにその流通をめざして蓄銭叙位令を発したものの、京・畿内を中心とした地域の外では、稲や布などの物品による取引が広く行われていた。」



4 奈良時代の道鏡の台頭について

【従来の説】①孝謙上皇の看病禪師となった道鏡は、上皇を籠絡し、異例の昇進を重ね、つには皇位を狙うようになった。②そのため宇佐八幡の偽の神託を仕組んだ。

【現在の説】①孝謙上皇が道鏡と親密になったのは、心の病に悩んでいた上皇が看病禪師としての道鏡を信頼したから。②宇佐八幡の神託は道鏡が仕組んだものではない。

【高校教科書：山川出版『詳説 日本史B』】「恵美押勝は後ろ盾であった光明皇太后が死去すると孤立を深め、孝謙太上天皇が自分の看病に当たった僧道鏡を寵愛して淳仁天皇と対立すると、危機感を募らせて764年に挙兵したが、太上天皇側に先制され滅ぼされた(恵美押勝の乱)。」

「769年には、称徳天皇が宇佐神宮の神託によって道鏡に皇位を譲ろうとする事件がおこったが、この動きは和氣清麻呂らの行動で挫折した。(脚注：九州の宇佐八幡神が道鏡の即位をうながすお告げをしたが、その神意を聞く使いとなった和氣清麻呂は、逆の神意報告をして道鏡の即位を挫折させた。清麻呂の行動の背景には、彼を支えた藤原百川ら道鏡に反対する貴族たちが存在したとみられる)」

ニッポン全国「穂高見命」めぐりの旅 (その3)

仁科神明宮 謎の簀社編 (前)

事務局次長 古川 幸 男

4月の総会の時に「次の仁科神明宮、楽しみにしています」とうれしいお言葉をいただきました。「やばいっ覚えている人がいる」今号は刈間さんの寄稿がいっぱいあるから、このコーナーは書かなくてもいいかと思ったのにい〜！しかも編集長からは1ページって言われた。「マジで??」そんなに書くことない。そもそもスキマを埋める企画だったのに、ホントの連載になっている。



それはさておき、簀社 (すのこしゃ) って皆さん知ってますか？ほぼほぼ皆さんご存じだとは思いますが、仁科神明宮の境内にあるんです！穂高見命が祀られています！しかも片屋根!! なんで??他のと比べてみるとみずぼらしい。つーか「すのこ」の意味が分からない。

広辞苑でひいてみると、①竹や葦で編んだ簀②水切りのため竹や板を間をすかせて張った床・縁または台。浴室や流しに用いる 等々書いてある。「簀」こんな字は日常生活においてまず見ることはない。日常会話でも遣ったことない。そういえば「あつたな」程度だよ。昔は「簀明神」とも呼ばれていたとのこと。すのこの明神っていわれてもなあ、ちっともありがたくない。どうして簀社だけ片屋根なのか？

仁科濫觴記っておもしろい古文書がある。現存するのは写本だけらしいのだが、それを現代語にして解説してくれているのが、仁科宗一郎著「安曇の古代～仁科濫觴記考～」。

それによると「簀社」についてこんな由緒が書かれています。第十代崇神天皇の末の王子「仁品親王」とその従臣集団がやって来て大町を本拠地として開拓した。弥

生文化を持ち込んできたとも言われている。その仁品王の重臣に両翼の臣と言われる武内山雄 (たけのうちさんゆう) と保高見熱躬 (ほたかみのあつみ) がいた。ある日、仁品王は感情のすれ違いから竹ムチで熱躬を殴った。熱躬は怒って都に上り、このことを帝に言いつけた。帝は仁品王に怒りを向け、これが仁品王の心労につながり死因となった。熱躬に対する憎しみは後々の代まで続き、神明宮内に熱躬が祀られた遷宮の翌朝、宮の屋根が砕け散っていた。

仁品王の子孫の誰かの仕業と思われるが定かではない。残された怨恨をたたきつけたのか？

一時しのぎに「簀」を張って過ごした。これが「簀社」と呼ばれる理由。神主さん達は神霊の怒りと受け取り、お詫び申し上げ片屋根にしたまま他と区別したとある。実際のところはどうか。熱躬は穂高見命なのか。謎が謎を呼ぶ「簀社」、謎はとけるのか、ますます深まるのか。次号、増ページで謎ときに真っ向勝負だ!!



仁科神明宮の簀社 (左) ・穂高見命を祀る

追伸：仁科神明宮は来年に御遷宮となります。本殿の葺き替え等の見学会や講座・講演会もあるようですので皆さまふるってご参加くださるようお願い致します!!

お詫びと訂正

会報「安曇人」第12号に掲載の保尊明彦氏が寄稿された「安曇野を偲んで」の文中、一部に誤植がありましたので、お詫びして訂正させていただきます。

(誤) 天文2年 (1532年) ⇒ (正) 天保2年 (1832年)

(誤) 厚美 ⇒ (正) 渥美

合よく利用し、尚且つ堂々と地域の研究誌に掲載されてしまったことについて痛烈な批判をされている。さらに、館長が専門とする考古学の世界での旧石器ねつ造事件との共通性にも言及して、「常に資料の取り扱いには襟を正していかなければならない」との思いを述べている。館長の歴史に向き合う真摯な態度と考えを知る事が出来た。安曇の歴史を学ぶ心構えを再確認するところですよ。

編集後記

金井 透

今春の定期総会の時の講演会で、豊科郷土博物館の新館長に就任された原明芳氏の講演を拝聴しました。そして原館長の「絵地図『東間見取』問題を考える」という論考を思い出ししました。この絵地図は承和九年(八四二)に歌人として有名な小野篁が描いたとされているが、原館長は絵地図が偽作であることを論証したうえで、無批判に自説に都合よく利用し、尚且つ堂々と地域の研究誌に掲載されてしまったことについて痛烈な批判をされている。さらに、館長が専門とする考古学の世界での旧石器ねつ造事件との共通性にも言及して、「常に資料の取り扱いには襟を正していかなければならない」との思いを述べている。館長の歴史に向き合う真摯な態度と考えを知る事が出来た。安曇の歴史を学ぶ心構えを再確認するところですよ。